
手紙

明斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N6486L

【作者名】

明斗

【あらすじ】

高校デビューした
主人公，清木場恭弥の
切ない恋や
熱い友情の
甘酸っぱいストーリー……

第一章　〈入学〉

〈The Letter〉

第一章

—入学—

春というにはまだ早い
肌寒い季節に、
俺はあいつに恋をした……。。

俺，清木場恭弥は高校生になり
現在は微妙な毎日を過ごしている。

なぜなら，
このクラスには
地元が同じ奴がいないから。

「オリエンテーションの実行委員
男女1人ずつ，
誰か立候補してくれないか？？」

朝のホームルーム，
担任の槇が
大きな声で叫んでいる。

恭弥は、
めんどくさそうに
目を背け……顔を伏せた。

「はいはいはい!!」
わたし、やりたいです!!」突然、大きな声で立ち上がり
手を上げる女子。

「おっ、佐藤!!よく言った!!」またアイツか。
やたら入学式ん時からウルサイ奴。

恭弥は、あきれた顔で
彼女を眺めていた。

周りの人は、
彼女の空気にのまれ……
賑やかに騒ぎ出す。

「よっしゃ、
女子は決定だな。
次は男子だ。誰かいなかー??」

立候補してくれる生徒がいて
うれしかったのだろうか、
槇は満面の笑みで
男子に話しかけた。

普通に考えて、
したい奴とかいないだろ。

恭弥は机にヒジをついた。
生徒たちは、
槇の視界に入らぬよう……
下を向いて座っている。

「仕方ないな。
じゃあポイント絞るか」

痺れを切らし、
担任はため息をついた。

「……そうだな
じゃあ、地元寺森の奴!!」

……は!?
ふざけんなよ!?

突然の言葉に、
恭弥は片手から顎を外した。
そして、
恐る恐る手を上げる。

「お、じゃあ……清木場に決定。
今日の放課後の
ミーティング頼むぞ!!」

と、満足気に微笑む担任。

……ついてない。

「は??? マジで!?! 最悪じゃんっ」

昼休み、

恭弥はそそくさと教室を抜け出し

……2組へ向かった。

2組には、

地元の仲間

田崎貞利と五十嵐貴之がいる。

「他人事だと思ってさ!」

実行委員に任命されたことを

ゲラゲラ笑う2人に、

恭弥はふてくされた表情を見せた。

「で、友達できたん?」

口を尖らす恭弥に、

貞利は心配そうな声をかけた。

「黒澤壮って奴と

一緒に行動してるけど」

恭弥は物足りなそうに呟く。

「2組ばっか来てたら駄目だろ」

貴之は、

あきれた顔で苦笑いをする。

「そんなこ……」

キンコンカンコン……

恭弥の言葉を遮るように、
チャイムの音が鳴り響く。

「ほら、5時間目始まるぞ。」

そう言って貞利は

恭弥の背中をポンと叩いた。

「帰りは迎えに行くから!!」

続けて、手をひらひらと振る貴之。

捨てられた犬のように、

寂しそうに歩く恭弥。「佐藤と一緒に実行委員とか、
めっちゃいいじゃん!!」

帰りのホームルーム中、

後ろの席の八木が話しかけてきた。

「佐藤?……ああ、あの子?」
“めっちゃいい”と言われても、
別に可愛いわけでもないし。

恭弥は、
賑やかに騒いでる彼女を
チラッと横目で見る。

「ああ見えても、
築山中では人気あったんだぜ!
おもしろいしなあ」

両腕を机の上に置いて
身を乗り出す八木は、
恭弥の耳にささやいた。

「……ふうーん」
恭弥は“興味がない”
と言わんばかりに
無表情で答えた。

「清木場くん行こう!!」
ホームルームが終わると、
佐藤野枝瑠は
真っ先に駆けつけてきた。

どんだけ張り切ってんだよ。

恭弥はかったるい事を
今すぐにでも放棄したい思いで、
面倒くさそうに立ち上がる。

「野枝瑠さあ、
今日スケート部の
マネージャー入ろうと
思ったんだけど間に合うかな??」

隣でぼやく佐藤。

……結構可愛いかな、この子。

恭弥は、
彼女の姿を無言で
見下ろしていた。

第二章　く恋心く

くThe Letterく

第二章

ー恋心ー

「6つのグループに分けるんで、くじ引きで決めますっ!!」

それから毎日
は忙しく過ぎていく。

恭弥は、
野枝瑠と実行委員の
仕事をしていくうちに、
クラスの男子とも
仲良くなることができた。

彼女の周りでは、
常に笑い声が飛び交っている。

「じゃあ、1組が最後だねえ」

そう言って、
空のティッシュの箱に入れた

くじを引く彼女。

そして、恭弥もくじを引く。

野枝瑠と一緒にグループだと
……楽しいだろうな。

恭弥は、
最後に引いた藁半紙のくじに
密かな願いを込めた。

恐る恐るくじを開くと、
書いてある文字は“3”。

周りに気づかれないように、
何気なく野枝瑠の
手の中を覗く恭弥。

目に映った文字は“6”。

心の奥で、
がっかりとした気持ちが
込み上げてくる。

「じゃあ、
班ごとに飯ごう炊きさんの

役割決めて、
今日は終わりにしよー！」

野枝瑠はくじを
ひらひらと振りながら、
クラスメート全員に
大きな声で話しかけた。

恭弥は、
寂しい気持ちで
自分の班に向かおうとした。

すると、
背後から野枝瑠が
声をかけてくる。

「一緒じゃなかったね！」

特に深い意味が
あるわけでもないが、
彼女の言葉で
妙な嬉しさが込み上げてくる。

「……ああ」

恭弥は、
野枝瑠に話しかけられたこと

が嬉しかった。

「最近，

2組にこなくなったじゃん。
友達できた??」

下校途中，

貞利が微笑みかけてくる。

「ああ！

結構皆と仲良くなった」

恭弥は満面の笑みでうなずいた。

「でも最近，

実行委員の仕事で
残ってばかりなんだろう??」

彼は，面倒くさがり屋の
恭弥を心配する。

「まあ……楽しいし」

貞利に指摘され，
改めて気づく……

ここ最近，

恭弥は野枝瑠と一緒に

仕事をするのが
楽しくてたまらなかった。

密かに隠していた
胸の奥の1つの気持ちを、
貞利に話そうか
話すまいか迷い出す。

「んだよ??
もじもじしてキモい」
貞利は眉をひそめ
恭弥に問いかけた。

すると恭弥は、
貞利に小さな声で
打ち明ける。

「マジで??
そっかあ、
好きな子かあ」
貞利は、
にんまりと頬の力を緩めた。

「誰かに言ったり、
広めんのなしだからな!!」

「はいはい」

いつの間にか
胸の中で生まれていたもの、

それは野枝瑠への
恋する気持ち……。。

恭弥は、

野枝瑠を好きになっていたのだ。

第三章　〈協力〉

〈The Letter〉 第三章

一灯り一

〈宿泊訓練当日〉

2泊3日の合宿で
親睦を深めようと開催される、
初めての学年イベント。

誰もが緊張と期待を
合わせ持ち、
恭弥たちのクラス……
1組のバスの中は
騒がしく賑やかだった。

そして、
その輪の中心にいるのは
……やっぱり野枝瑠。

小さな体でちょこまか動く
クラスのムードメーカー的存在
な彼女に全員が明るさを求めている。

「お菓子食べる??」

恭弥は、

実行委員という役のお陰で

野枝瑠と一緒に

ペアを組むことが多かった。

「ああ、食べる」

バスの座席さえも、

特等席をつかむことができた。

「このお菓子すごい好きなんだよ!」

野枝瑠の差し出した

スナック菓子に手を伸ばし、

恭弥の気持ちは高ぶってゆく。

「野枝瑠も、これ好きっ!」

これといって

可愛いわけでもない彼女を、

いつの間にか

好きになってしまった。

恭弥は、

このオリエンテーションが

終わらなければいいのに

と、強く願っていた。

合宿所に着くなり、
目まぐるしく始まる
作業の数々。

グループに分かれるときは、
野枝瑠とも離れ離れ。

飯ごう炊さんや
山登りの時間になれば、
恭弥は6班の方を
チラチラと気にして
視線を送るのだった。

他の男子たちと
賑やかに騒ぐ野枝瑠の
姿を見るたびに、
恭弥の中でイライラした
感情が込み上げてくる。

「どうした？ 恭弥」

「……えっ？」

モヤモヤした気持ちで
暗い顔をしていた

恭弥を気遣い、
祐太が声をかけてくる。

「何でもない……!」

すっかり落ち込んでしまった恭弥は、
ため息をつきながら答えた。

「野枝瑠か?」

恭弥の態度にピンと来た様子で、
祐太は口を開いた。

「クラスの何人かは、
恭弥が野枝瑠のこと
好きだって噂してるし」

「嘘っ!?!」

そう呟く彼に、
恭弥は“ヤバイ”
というかのように言う。

「やっぱり好きなんだあ?」

祐太はニヤニヤと
顔を覗き込んでくる。

「協力してやるか?」

顔を真っ赤に染める恭弥に
祐太はにんまりと微笑み
耳元でささやく。

「いやいや、
いいよいいよ!!」

焦った様子で、
恭弥は両手を
素早く振った。

「何言ってるんだよ!
協力してやるって!
素直に打ち明けるよ」

自信満々に、
祐太は微笑んでくる。

戸惑いつつも、
恭弥は彼の案に乗った。

「今日の晩さ、
一緒に女子の部屋行こうよ!
……実はな
俺も好きな奴いるんだよ。
野枝瑠と仲良い子だしさあ!」

“祐太の好きな子”

……恭弥は、
なんとなく気づいていた。

祐太は、
クラスではそこまで
女子と仲良くしている
というワケでもないが、
同じクラスの松本寛子とは
よく話している。

「……松本？」

恭弥は、
小さな声で問いかけた。

彼は、
少し照れた表情で
こくりとうなずいた。

「……え、
でも女子の部屋
ってやばくない？？」

「いけるって！
あいつらも“おいで”
って言ってるし」

……そういう問題か？

先生にばれたら……。

頭の中で，

不安が募っていく。

でも，

断りづらい。

結局……

祐太の勢いに負けて，

恭弥は野枝瑠たちの部屋に

押し掛けることに

なってしまったのだ。

第四章 無謀

（The Letter） 第四章

—無謀—

「じゃあ、
後で行くから—」

入浴時間を終え
フロアで女子とすれ違うとき、
祐太は松本たちと
一言交わしていた。

「なんか緊張するなあ」

“女子の部屋に行く”

それは……
物凄くドキドキする行為であり、
少し恥ずかしいことでもあった。

「おー！来た来た！
今からランプするけど
一緒にやるでしょ？」

女子の部屋に到着すると、
カードを手にした松本が
呼びかけてくる。

皆で楽しくゲームをしていると、
野枝瑠はいつの間にか
周囲の盛り上げ役になっている。

祐太の上手い手回しにより、
恭弥は野枝瑠の
隣に座ることができた。

「そろそろ就寝時間だな
先生にバレる前に帰らないと！
行くぞ恭弥。」

部屋の壁にかかっている
時計を見上げ、
祐太が声をかけてくる。

恭弥はうなずき、
部屋を出た。

「ちょい待て、
お前らなんで
こんなところにいるんだ!？」

突然、

背後から怒鳴り声が
飛んでくる。

ビクッと、
反り返る背筋。

2人は足を止め
……恐る恐る振り返った。

「どうということだ？」

そこに立っていたのは
槇先生だった。

2人の顔は、
みるみる青ざめていく。

その後2人は
槇にこっぴどく叱られた。

自分たちの部屋に戻ると、
先生たちに叱られたことを
おかしく笑いながら
明るく迎える男子もいれば、
女子たちに会いに行ったことに対し
批判の目で見える男子もいた。

「清木場と片岡、

女子の部屋行ったらしいよ」

「……実行委員のくせに」

背後から聞こえた
数人の小声。

「気にすんなよ。
野枝瑠も寛子も人気だし
妬んでるんだろ」

肩を落とす恭弥を、
祐太は明るく励ました。

「あんな奴らに
負けてられねーな!!」

彼は恭弥に
力強く声をかけた。

「大丈夫だったー?」

次の日の夜、
キャンプファイヤーの
炎を前に
野枝瑠が話かけてくる。

「……めっちゃ怒られた」

恭弥は、
眉を下げて苦笑いをした。

「マジでー??」

あちゃー

といった顔で微笑む彼女。

恭弥は“実行委員”

という役選ばれたおかげで、
彼女のそばにいられることを
とても嬉しく感じていた。

「めっちゃ綺麗っ!!」

突然大きな声をあげ、
野枝瑠は空を指差す。

声につられて、
恭弥は上をみた。

プラネタリウムに
いるかのような満天の星空。

「……ほんとだ」

いままで見たことのない光景に、
恭弥は感動した。

「来て良かったねえ」

彼女は、

顔をクシャツと崩し

微笑みかけてくる。

恭弥は、

胸がキュンと苦しくなった。

……やっぱ好きだあ。

目の前で激しく燃え上がる炎に、

野枝瑠の横顔は

赤く照らされている。

恭弥は、

熱い思いで

息苦しくなるほど、

彼女を見つめていた。

あっという間に、

オリエンテーションは

終わりを迎えた。

生徒たちは、

疲れた表情でバスに乗っている。

隣で眠る野枝瑠。

恭弥はそつと上着を脱いで
彼女の体にかけた。

いつの間にか
眠っていた恭弥は、
バスの揺れで目を覚ました。

そして、

野枝瑠の肩に
頭をのせていることに気づく。

「ごめんっ……！」

恭弥は飛び起きて
野枝瑠に謝った。

「……ううん」

野枝瑠はふいっと目を背け
体を覆う上着に手を伸ばす。

「……ありがとう」

小声で呟く彼女の耳は、
真っ赤に染まっていく。

第五章 〈視線〉

〈The Letter〉 第五章

—視線—

「最近2年の奴ら
やたら見てこね？」

体育の授業中，
貞利がささやいてくる。

「え？」

恭弥は，
何のことか理解できず
首をかしげた。

「……2階見てみ」

貞利は，

真っ直ぐ前を向きながら答えた。

言われるまま振り返り，
恭弥は2階を見上げる。

……2年の男子が，

2階から野枝瑠たちを
見下ろしていた。

「ほんとだ」

恭弥は、
すぐに目を背け
前を向いた。

「あれ多分

……野枝瑠狙いだよ」

「なんでっ？」

貞利の発言に驚き、
恭弥は声をあらげた。

「気付いてなかった？

最近あいつら

廊下とかで野枝瑠とすれ違う度に
騒いでるんだぜ。

“野枝瑠ちゃん”とか言ってるの
聞こえたこともあるし……」

貞利はニヤニヤと微笑んだ。

恭弥は信じられない気持ちで
軽く笑い飛ばす。

「まあ見ててみ、
多分だけどな」

貞利は、
笑みを浮かべる。

……まさかつ。

再度、
2階に目を向ける。

その後も、
恭弥は彼らの視線を感じながら
……授業を受けたのだった。

「……ほら来た。
こんなところ2年が
歩くこと自体おかしいだろ」

移動教室からの帰り、
廊下で貞利が呟く。

前を見ると、
数人の男子が向こうから
歩いてきている。

野枝瑠は
……後ろ。

だんだんと近づくにつれ、
野枝瑠は顔を伏せる。

少しばかり、
歩く速度も早くなる。

「「野枝瑠” って子
……あの子だろ？」

すれ違った後、
背後から聞こえた声。

ほらな
と言わんばかりに、
貞利が横目で
サインを送ってくる。

「うかうかして
られないな！」

貞利は、
困る恭弥を面白がる。

……日がたつにつれ、
彼らは恭弥の視界に
多く入るようになっていた。

クラスの周りを

うろちよろと

うろつくことも多くなり、

野枝瑠と目が合うと

手を振ることもある。

「佐藤ー！

2年の人が呼んでるぞ」

ある日の昼休み、

友達と雑誌を読む野枝瑠に

壮が近づいていた。

壮の指さす方向を振り向くと、

例の2年生たちが

ドアぎわで立っている。

2年生たちの元へ向う野枝瑠。

アワアワと焦る恭弥の背中を

貞利はポンポンと軽く叩いた。

そして、

耳元で囁く。

「なんかされそうになったら
助けてやれよ」

「まあ、

少し付き合ってから
断ればいいじゃん」

困りはてる野枝瑠に、
寛子が話かけている。

どうやら

少しの間だけ付き合ってみて、
それから決めるらしい。

「断ればって……
断るとき恐いし」

「いけるって！

“好きな人いる”

って言ってるんだから
理解してくれるって。」

寛子はニツコリ微笑む。

好きな人……

恭弥は複雑な気持ちで
野枝瑠たちの会話から
耳を背けた。

「どうしたの？」

掃除の時間、

恭弥は落ち込む野枝瑠に近づく。

野枝瑠は小さな声で話します。

寺辻拓也という2年生が

沢山の友人を連れて

野枝瑠を誘ってくるのだが

寺辻の後ろで、

ギンギンにオーラを放つ軍団が

恐くて誘いを断ることができず、

カラオケの誘いに

うなずいてしまったのだ。

今にも泣き出しそうな

顔な野枝瑠を見て

恭弥は2年生の元へ向かった。

「……あの

野枝瑠なんですが

今日具合悪くして

行けないみたいなんですけど」

野枝瑠から事情を聞き、

すぐに寺辻の元へ駆けつけた。

「だからって、
なんでお前が言いにくるんだよ!？」

「クラスメートですから」

感情的に言葉を吐く軍団に、
恭弥は毅然とした態度で答える。

「お前、
なんも関係ないだろ!？」

突然軍団の1人が
彼の胸ぐらをつかみだした。

「クラスメートですから」

……一瞬で凍りついた空気。
恭弥は、
挑発的にアゴを
突き出して言い返す。

「なんだと!？ てめえっ!！」

胸ぐらをつかんでいた男が
大きな声を上げた。

その時……

「いいから!!」

寺辻が止めに入った。

……首元をつかむ手の力が
次第に抜けていく。

「……じゃあ、

あの子に言っというて。

“早く元気になってな” って」

寺辻は、

少し寂しげな表情を浮かべ
小さく呟いた。

正直恐かった……

野枝瑠の為に

ここまでできる自分。

恭弥は自分が

本当に野枝瑠を愛してる

そう痛感していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6486/>

手紙

2010年10月10日02時20分発行